

地域社会と真宗

——墓を持たない門徒の民俗世界をめぐって——

本 林 靖 久

一 地域社会と宗教

社会学における地域社会と宗教に関する研究には、大別すると、①伝統的地域社会における宗教世界の存在様式に関するものと、②近・現代の地域社会における宗教の動態に関するものが挙げられる。前者においては地域社会としての(村落・共同体が局地的小宇宙として閉鎖性をもったものとして捉えられ、その世界観、価値体系を表述しているものとして宗教が取り扱われている。一方、後者においては、近・現代の地域社会の変動と宗教の変容過程を相似的に捉え、地域社会における宗教を歴史的展開のなかで分析しようとしている。

このような地域社会と宗教に関する従来の研究視点を踏まえたうえで、伝統的な真宗村落に見られる墓を持たない習俗(＝無墓制)を取りあげ、地域社会と真宗の関係から無墓制の問題を整理してみたい。

二 無墓制村落の民俗世界

福井県三方郡三方町佐古ムラには、浄土真宗本願寺派常徳寺があり、全戸(三十七戸)がこの寺院の門徒である。村内には墓がなく、また、各家とも神棚を持たない。死者は、寺院での葬式、火葬の後、一部は京都の大谷本廟(西大谷)に祖壇納骨され、残りは焼場に放置される。ただし、納骨されるお骨は三回忌まで家

の仏壇に置かれる。神棚を持たないため、戦時中に毎年、伊勢神宮から下付されるお札(大麻)は、一括して村内の氏神である天神社に奉納し、次年度に神社境内の一隅に「奉焼地」を造り焼却していた。また、今日でも三方郡神社会から下付されるお札は、神社に一括奉納され、翌年に焼却される。

一方、隣村の田名ムラも村内にある浄土真宗本願寺派安養寺を手次とする二十五戸の集落である。門徒の家には神棚がないことや、村人の寺院や神社などの行事における関わり方などは、佐古ムラとそれほど変わりのない宗教生活をしている。

このような二ヶ村の真宗門徒にとっては、伝統的な祖霊信仰がかなり希薄、あるいは相違しているように思われる。

例えば、佐古ムラや田名ムラの門徒の先祖観を、民俗宗教の根幹である祖先崇拜と比較してみると、二ヶ村の門徒の村落空間における宗教システムには、死後、一定の真宗儀礼を経過していきながらも、先祖のカミ観念への志向性が認められるのである。

田名ムラの真宗社会では、宗教システムにみられる村落空間の構図が、多くの日本人の先祖観と同様な構図を持ちながらも、門徒の先祖観はカミ観念を志向せず、絶えず阿弥陀仏を志向している。このことは仏壇のみを信仰の対象とし、神棚を設けないこのムラの門徒の宗教的態度とも合い通じるものである。

また、佐古ムラの門徒の先祖観も民俗的祖霊信仰を根底におきながらも、阿弥陀仏のみを信仰の対象とする宗教的転換が行われ、カミ観念に傾斜しない「真宗独自の先祖観」という宗教システムを作りあげてきたように思われるのである。

三 無墓制の再検討

従来の無墓制の研究は、両墓制の概念をもとに捉え、両墓制の

檀家(他宗派)に見られる石塔(詣り墓)の代わりが、真宗門徒の場合では、各家の仏壇や手次寺の本堂であると指摘されてきた。特に真宗の無墓制は本堂を「集合詣り墓」とする。無墓制もしくは多墓制(「無墓制に代るもの」として捉え、これは真宗が従来の墓制を内容的に踏襲しながら、伝承的な教義に合致する形態を与えたことによるものであるとされている。つまり、このような詣り墓を持たないことを正当化した教説は、その地域の門徒が伝承した真宗教義の一環をなすものであるとされている。

そのうえで、死者の遺骨(遺髪)を奉安したいという欲求を手次寺納骨や本山納骨という方法で昇華させてきたことが、無墓制を存続させてきた大きな要因とみられているのである。

ここでは、真宗門徒の無墓制を構造的な観点(共時性)から捉えると、基本的には阿弥陀信仰(真宗信仰)、開山信仰(祖師崇拜)、民俗信仰(祖先崇拜)の三項図式で提示することができるのである。つまり、先祖を祀る墓(民俗信仰)の代わりを各家の仏壇や手次寺の本堂(本尊)が担ったこと(阿弥陀信仰)と、遺骨を親鸞のもとに納める本山納骨の儀礼(開山信仰)とがそれぞれ全体として一つの真宗文化をつくったところに無墓制が存立していると考えられる。

四 地域社会と真宗

ところで、現在の無墓制村落の多くが、真宗が布教される以前には墓(石塔)があったにもかかわらず、真宗に転宗後に墓を持たない宗教生活に変っている。そこには、真宗の反民俗性としての側面を無視することはできない。このような宗教的行為の転換は、おそらく、真宗寺院の歴代住職を中心とした教化活動が、寺院に対する門徒の求心性の引きだし、各門徒が真宗信仰を村落共

同体における集団全体の信仰として意識する過程で成立し、伝統的地域社会(ムラ社会)が自己完結(閉鎖)的で固定(安定)的な村落構造を保持してきたことによって持続してきたものと思われる。

すなわち、無墓制を形成し、維持する真宗門徒の行動様式とは、門徒の真宗(阿弥陀仏)に対する篤信性が地域(ムラ)社会の構造的な連関を反映したなかに形成されると言えよう。その意味では、先の二ヶ村の真宗門徒の宗教意識と村落構造とのあいだには、墓を持たないことにおいて相互連関性が認められると言えよう。

しかし、このような社会学の視点に立って、地域社会と真宗の問題、例えば無墓制の習俗を考える場合に、個々の地域社会(無墓制村落)における歴史的な差異を無視して捉えることは、その本質(概念規定)を不明瞭で、曖昧なものにさせることになると言わざるを得ない。そこで、共時的、構造的に探っていくと同時に、地域社会の重層性の解明、つまり通時的に可能なかぎり歴史的な背景を探ることが重要であると言えよう。

そのうえで、火葬と土葬による地域性の相違や地域社会を離れた本山に納骨する儀礼の問題をも検討していくことが、無墓制の習俗の全体像を明らかにし、また、地域社会における真宗の問題を考えるうえにも一つの示唆を与えてくれることになると思われる。